

【森氏】

大学評価・学位授与機構の森でございます。

それで今日は盛りだくさんのお話を伺うことができて、少し頭がいっぱいになっているところかと思えますけれども、最後の木村先生のご発表の一番最後に見せていただいたデータをもう一度見せていただくと、再入学可能性となっていますけれども、これは JCIRP がこれまで調査してきた項目です。もう一度大学を選び直すことができたならば、あなたが今いる本学、この大学にもう一度入りますかという問いです。これが JCIRP という調査に協力してくださった日本中の大学の、複数の大学の学生さんがもう一度大学を選び直せたら、今いる大学に進学すると思っている人たちの、絶対もう一度来るとい人から、絶対来ないという人まで分布を示したものです。これは全国のデータをまとめたものですが、先ほど木村先生からお話しいただきましたように、この調査に参加なされると、うちの大学の学生さんたちがもう一遍うちの大学に進学したいと思っているかどうかデータに出るといようなことが、項目ごとに分かるようになるというのが、このお話しのお肝であったかと思えます。

そこまでが、最後に木村先生見せてくださったデータの意味、それから JCIRP という学生調査の意味についての確認でしたけれども、この大学にもう一度入りますかという設問があると聞いてみると、この学生調査をご自分の大学でやってみたら一体どんな結果が出るのか、それをどう使うかはともかくとして、とにかく好奇心があるというふうにお感じの方も多くいらっしゃるのではないかと思います。そこで、このデータを少し眺めながら今日の公開研究会の意味について少し考えたいと思います。

確認ですけれども、今回の公開研究会のタイトルは、「学生調査と IR(Institutional Research)」でした。それで、今日のお話しは、学生調査に多くの時間とエネルギーが割かれましたが、確認しなければならないことは、学生調査が IR のすべてではないということかと思えます。つまり学生調査は IR の部分集合であるといのか、Institutional Research のとても大切な一部をなすのが学生調査であるといかと思えます。だから、IR 全体は何をするかといと、これは山田先生からお話がありました。高等

教育機関にかかわるデータの教育研究、学生支援および管理運営等にかかわるデータ収集と分析を行い、改善に繋げるというのが **Institutional Research** のするところであろうかと思えます。

このデータの収集や分析を行う仕事をするとところが、大学の中でひとつの部局に集中していたら、それは **IR** オフィスだというふうには呼ばれることになる。しかし、そのようなオフィスがあるのは沖先生のご発表によると、日本の私立大学で30%くらいである。実は私どもは、そちらにいらっしゃいます、東京大学の小林雅之先生と一緒に2013年に別の調査をいたしまして、国立大学と公立大学と私立大学を混ぜた全国の大学の **IR** オフィスの有無に関しても調査いたしました。やはり、**IR** オフィスのような部署のある大学の比率は30%です。残りの70%の大学では、特にデータは集中していない。先ほど木村先生が言われたように、各部署で似たようなデータがバラバラにあるというふうになっていて、日本の **IR** の現状としては、多部署での **IR** の機能分担というふうに言えるかと思えます。ただし、沖先生のご報告にありましたように、5年半の間に、データが集中する **IR** オフィスを持つような大学は、パーセンテージでいうと倍になっていることも、今日われわれが勉強したところであります。

その **IR** 機能のひとつの部局への集中と同時に、杉谷先生にご報告いただきましたジェイ・サープのお話によると、入学から卒業に至るまで一貫したデータのサービスができるような仕掛けができていて、その一極集中とそれからデータの一貫性というのはおそらくは同時進行的に進んでいるのではないかと思えます。この **IR(Institutional Research)**を語る上では、少なくともデータというのがすべての前提になっていて、データがなくては始まらないのですけれども、しかし、これも木村先生のお話にありましたが、データを集めてきて、見ただけで終わるという危険が、大学の **Institutional Research** には常に付きまとう。つまり、集められてきた数値を意味のある情報に転換するという、ここには英知が必要である。あるいは、先ほどのご質問にあった言葉を使えば、インテリジェンスが必要であろうかと思われます。この、数値から情報へのインテリジェンスによる転換というのが、管理運営に使われるのか教学に使われるの

かというのが、今日の前半の問いのひとつだったかと思います。日本の IR が、これからどうなるかは分からないのですけれども、一応将来を占うために 60 年から 70 年の歴史があるアメリカの IR を見ますと、IR 部局はまず何をするかというと、執行部に情報を提供する。ここで執行部が数字を見るだけで終わるのか、インテリジェンスを用いて意味のある情報に転換しうるのかというのは、これはもう IR オフィスの機能の根幹であろうと思います。ですから、IR の機能を持ったら、それを意味のある情報に転換するような英知、インテリジェンスが、執行部なりどこなりにあるかというのが、ひとつ重要なことであろうかと感じました。

それから、執行部が数値を情報に転換することに成功したならば、それは多くの管理運営の改善に繋がると思うのですけれども、このアメリカの IR オフィスの場合、第一の仕事は先ほど申しあげましたように、執行部への情報提供ですが、それ以外に IR オフィスが何の役に立っているかという調査をしますと、多くの場合、学生の学習成果を上げることに直接 IR オフィスとしてかかわっているというような調査結果も出ています。

というわけで、山田先生のお話しにあったように教学 IR、あるいは管理運営のための IR というものがあるとして、IR というのは、どちらの機能も果たしうると考えて良いと思うのですけれども、特に今日後半でご報告のありました、ジェイ・サープという学生にかかわる調査は、実は学生を対象とした調査でありながら、教学にもそして管理運営にも使えるようなエビデンスの提供をしてくれるような仕掛けであると言っていいというふう感じた次第でございます。

では、あらためて、広い全国調査のお話から、具体的なツールとしての IR は何かというお話など多岐にわたりましたけれども、4 件のご報告に関するご質問、あるいはコメントがございましたら承りたいと思います。

【質問者】

先ほど、大学 IR に関しまして、大学 IR コンソーシアムが学生調査をやっています

けども、その範囲は学生生活や学修に絞り込んでいると思いますが、その調査のデータベースとこのジェイ・サープのデータベースの関係と伺いますか、今後の発展性について伺いますか、そういった将来構想等ありましたらお聞かせいただければと思います。

【山田氏】

確かに私も大学 IR コンソーシアムの方は関わっておりますけれども、基本的に大学 IR コンソーシアムの方は、学生調査を使いますが、それだけではないのがポイントです。つまり、もし参加されている大学様がおありだったらお分かりになると思いますが、あちらの方はシステムの中に大学にあります、さまざまな直接のデータを放り込みます。これは、たとえば学生の取得した単位であるとか、そういう直接のデータを放り込んで、そして、学生調査と統合するということから、日本でもほとんどなされていない直接評価と間接評価にシステムを通じて結びつけるというような特殊性がございます。

私どもの方は、全くそういうことは関係なく、あくまでもこれは学生調査だけです。学生調査に関しましても、学部単位で全国の大学様から参加していただいて、実際に私のプレゼンテーションの中でも申しあげたように、たとえば 2014 年に参加することがあって、2015 年に参加することがないかもしれません。あるいは、5 年後に参加するといったようにその時の状況に応じて参加することが、学部単位でできるようになっているということでありまして、その直接評価と結びつけるということではできませんので、あくまでも学生調査を主体にしたツールだけ、それをデータベースで会員に分かりやすく使っていただくというようなサービスしか入っておりません。だから、コンセプトは、かなり差異化があるというようにお考えいただければと思います。

【森氏】

では、司会がまた出しゃばりますけれども、今日ご紹介いただいたジェイ・サー

プというもの、詳しく知りたいという人はどうすればいいのでしょうか。

【山田氏】

新しいコンセプトのジェイ・サープに関しては、URLができあがっているかと思えます。カタカナの「ジェイ・サープ」という形で検索していただきますと出てまいります。こちらに詳しい内容が出ていますので、ぜひご覧いただければ、ジェイ・サープの概要が分かるかと思えます。

実際には今年度の3月あたりから始めて、新入生調査はオリエンテーション期間中にできればしていただきたいなというところであります。

大学生調査は、上級生調査になっておりますけれど、これは随時出来るような形にしているのが、特徴かと思えます。研究段階では、ものすごく時期を限定させていただいていたんですけども、かなり簡便に申し込みができて使えるようになってくるというのが特徴でもございます。

【森氏】

他にコンセプトのこと、IR そのもののこと、それからこの学生調査のプロジェクトのこと何でも結構ですので、ご質問やコメントがございましたら、お願いいたします。

【質問者】

学生調査票自体を見ることは、可能でしょうか。

【木村氏】

基本的に、私の方で紹介しましたデータベースを見ていただければ、以前のジェイ・サープの調査で何が質問項目として入っていたかはお分かり頂けるのではないかと思います。基本的には、そこから、質問項目を削ったり、必要なものを追加したりしているだけでございますので、そういうようにご理解頂ければと思います。

【森氏】

データベースの中からだいたい回答項目数で40%ほど無くして簡略化、簡素化したものがジェイ・サープの本体になるであろうということで、具体的な質問項目は、木村先生が見せてくださったデータベースと、今日の杉谷先生のご報告のパワーポイントの中にも一部紹介されていると考えて良いかというふうに理解いたしました。

【質問者】

ローデータから意義あるデータに転換することが大事だと伺いましたが、意義あるデータに転換するための担当者の能力ですが、ある程度の技術を持たないと難しいのか、それとも担当者は事務職員が多いようですが、平たく言うと素人でも意義あるデータを作れるかどうか、そのことをお聞かせください。

【森氏】

はい、まず私からお答えいたします。

おっしゃるとおり、ある程度の統計を読む力というのは必要だと思います。ただ、それだけではなくて、むしろ重要なのはうちの大学で何が問題かという文脈を読む力だと私は思っています。だから、愛がないとデータは読めない。愛だけでは読めないですけれども、愛と数値がIRに必要なものだと個人的には思っております。

【山田氏】

確かにそうですね。ある程度、現在の政策動向であるとか、そういうことを知っていることがひとつ、そして、もうひとつは、自分の大学の学生というものの特徴を把握しているということが大事だと思います。その上で、深く分析しようとする統計的技術が必要ですが、自分の大学の学生の特徴とか問題点、あるいは改善すべき点、あるいは良いところ、政策動向というのがある程度分かっていると、それを頭に入れた形でデータを読むこと、あるいはデータを解析することができるのではない

かと思えます。ただ、技術的なところというのは、どうしても何らかの形でできるようにならなければいけませんけれども、それは、いろいろなところでワークショップがあるかと思えますので、そういうのを利用していただくことも必要かと思えます。

【質問者】

専任、兼任にしても、担当者を選ぶというのは、その辺で失敗するか、見る目があるかどうか気になるところですけれども、ある程度の人を選べば、その方を OJT やこういう研修の機会等で育て上げるということでしょうか。

【沖氏】

今のご指摘は非常に重要であり、しかし、答えはひとつでないということになります。たとえば、それはおそらく各大学の今出てきたもので言えば、教務委員会ですとか入試委員会で何を求めているか。そこに対してどういう情報を出すべきなのか。ほとんど求めていなければ、先ほどから出ているデータベースで、少なくとも数字を見せる。まさに PC が使えるという技量で、単純集計なり数年参加していただければ経年変化も見えますから、そこから読み取るという基礎的なことができる。その先の深い議論ですと、少なくとも最低限のクロス集計とかその統計的な意味というのを見るところの力量があれば、たぶん委員会レベルで必要なものはほとんど揃うだろうと思います。とすると、研修もそれほど長期的にやる必要はないと思います。その先まで求めている大学があるとしたら、逆により専門的な力量を持っている人をそこに充てた方が話は早いと思いますので、そういう研修なりを出来るだけ各大学のニーズに応じて調整できる形で、たとえば分析ができる人がいれば、ぜひデータを基に分析していただければいいし、そうでなければ先ほどのデータベースの形で、目に見える形のグラフにさせていただいて使っていただくといいのかなと思います。それほど深刻な問題ではないかと思えます。

【山田氏】

少し付け加えさせていただきます。実は今日、東京大学の小林先生もお出でになっておりますけれども、日本高等教育学会というところございまして、私どもその会員なんです。日本高等教育学会では、実は今年6月に大阪大学で学会を開催した時に世の中のIRへの関心を反映いたしまして、IRワークショップというのを開催いたしました。会員以外の方もたくさん参加されます。来年もIRワークショップの2回目をしようと思っておりますので、そういうところで技術など、色々な事例などを聞いていただいて研修に使っていただくこともできるかと思っております。

【杉谷氏】

統計的な知識というのはもちろん必要かと思えます。一方で、参加する際に敷居を高くするつもりはないのですけれども、どういう目的で利用されるかということはある程度想定されていた方が良くかと思えます。「ご利用は計画的に」ではないですが、ただやみくもに学生調査をすれば良いというわけではなくて、たとえば2年おきに3年生のデータを定期的にとってみようとか、そういうようなある程度の計画性と目的を考えた上で参加されることが、統計的な技術と同じくらい大事なことかと思えます。

【森氏】

その計画性に関してですけれども、そうはいつでもこのジェイ・サーブはお仕着せの質問で、幕の内のようにメニューが並んでいるのですけれども、それ以外に各大学さんのオリジナルの質問をつけるマージンというのを取っております。だから、お仕着せの部分に無くて、どうしてもうちの大学の文脈に沿ってこれは聞かねばならないというのは、付加的に付けることができるというデザインになっていると聞いていますけど、それでよろしかったでしょうか。それでよろしいそうです。

では、そろそろお約束したお時間が近づいてまいりましたので、私の司会はここまででございます。ありがとうございました。